

被災地をみつめて、
「地域の力」を考える

社会環境学専攻 社会学講座

辻 岳史さん 博士後期課程3年

かけがえのない命だけでなく、長い年月のなか築きあげた地域の蓄積を奪い去った東日本大震災。辻岳史さんは、2012年2月から、被災した宮城県東松島市、名取市、女川町を対象に、その復興まちづくりのプロセスをテーマに研究を進めている。震災によって、地域社会を担う行政や様々な地域住民組織がどう利害調整を図りながら復興に向けて意思決定を繰り返すのか、資料を収集し、インタビューやアンケート調査を行いながら、持続的な復興を可能にするガバナンスを構想しようというものだ。

「震災の調査ですと言っても怪しいですよ。だからまず地域の昔の話を聞いて顔を覚えてもらうようにしました」と辻さん。ぼつんと建つプレハブの消防団詰所に通い区長さんたちと話をしながら、市の広報や議会議事録、地元の新聞など資料を集め、震災前の地域の姿を追った。商工会、子供会、祭の組織…時代時代に様々な住民組織が立ち上がり、地域と関わっていた。さらに各部署の行政担当者や住民組織の代表者等へのインタビュー、地域の会合に同席するなかで見えてきたのは、復興には、震災前からのそうした組織と行政、コミュニティとの関係性が非常に重要だということ。「例えば女川町は原発を巡って地域に亀裂がありました。スポーツ大会や祭りなど全庁的なイベントがすごく多くて、それが結果としてコミュニティ間の亀裂、住民と自治体の亀裂を埋めていくことになった。こういう関係を築いてきた地域の歴史が復興のプロセスにも影響していくのでは」と言う。

被災地に通い続けて4年。家や道路は新しくなっても、地域が乗り越えなくてはならない課題は次々に襲ってくる。人口減少、高齢化、医療、地域産業の衰退 etc. その中で意思決定に関わる住民組織をどう再編していくのか。その困難さを実感する辻さんだが、「そこに、今まで地域に関わってこなかった新しい人たちが参加する、新しい仕組みの芽があるかもしれない」と期待を寄せる。これからも三地域の復興を通じて、地域の多様性と力を見ていきたいと考えている。



辻さん

女川町
女川復興祭で披露された
「獅子振り」(2015.3)



東松島市
高台移転による宅地造成が進む
野蒜北部丘陵地区(2015.12)



名取市
関上地区まちづくり協議会に
ついての意見交換会(2014.2)